

# 文化財通信くまもと

第12号  
平成9年2月  
熊本県教育委員会



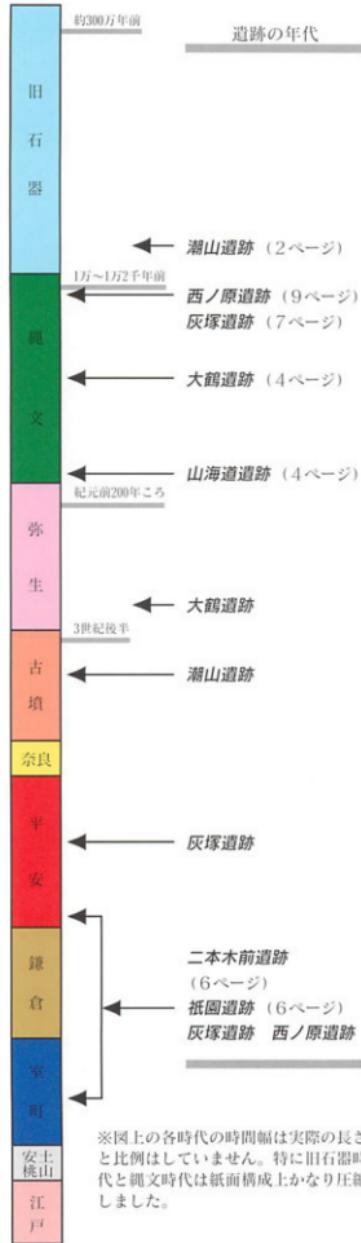
白水村紙園遺跡出土元代磁州系白地黒絵壺

## はじめに

『文化財通信くまもと』第12号は、平成7年度から平成8年度にかけて行われた農業農村整備事業に伴う、埋蔵文化財発掘調査のうち、主要な遺跡についてその概要を取りまとめたものです。今後、本格的な報告書が刊行される予定ですが、それまでにはかなりの時間がかかります。今回の小冊子はその速報としてお使い下さい。

なお、今回は遺跡の内容をより分かりやすく知っていただくため、それぞれの遺跡の特徴を見出しにしました。また、最後に「解説」もつけましたのでご一読ください。

遺跡一覧と遺跡所在地図は裏表紙に載せていますが、詳しいものではありません。遺跡を見学されたい方は地元の教育委員会か熊本県文化課までご連絡ください。それではゆっくりご覧ください。



## 3万年前の初期新人の キャンプ跡か?

湯前町 潮山遺跡

潮山遺跡には2つの時代の遺跡が重なって発見されました。今から約1600年前の古墳時代と今から約3万年前の旧石器時代の遺跡です。

古墳時代の遺跡はいわゆるムラの跡でした。今回調査した地点はムラが広がっていると思われる平坦な地形のはしに位置することから、ムラのはずれにあると考えられます。遺跡からは住居の跡が5軒、何ヶを貯蔵したと考えられる小屋が3軒で合計8棟の建物が見つかりました。いずれも地面を掘りくぼめて床をつくる堅穴式の建物でした。

中からは当時使われていた土器が出土しています。煮炊きに使った甕、おそなえ物をのせた高杯などです。これらの土器は土器師と呼ばれる赤焼きの土器です。なお、古墳時代（5世紀ごろ）になって大陸から伝わった須恵器は発見されていません。

旧石器時代の遺跡は旧石器時代人がキャンプをしながら何らかの作業をした場所でした。潮山遺跡で発見されたのは当時使っていた石器だけでした。石器は広く散らばって出土するのではなく、直径2~4mほどの円形の範囲に集中して発見されています。そして、その集中部分が4カ所確認されました。



調査の様子

出土した石器には4種類のものがありました。人間が意図的に石器の形を整えるために一部を細かく打ちかいたもの（定形石器）、動物の肉や木の枝を切ったり削ったりした時に石器にそのきずが残ったもの（使用痕のある剥片）、それらの素材となった剥片と呼ばれるもの、そして、その剥片を剥ぎ取った核となつたものの（石核）の4種です。この中で一番数が多かったのは使用痕のある剥片と普通の剥片でした。定形石器や石核はほんの数点にとどまりました。

これらの石器の様子から判断すれば、石器の集中する4カ所の場所で切ったり削ったりの作業が行われたと考えてよいでしょう。しかし、何をどのようにしたのかははっきりとは言えません。ただ、この作業の中に狩りのえものを解体したり、狩りの道具を加工した



旧石器が顔を出したところ

りすることもふくまれると思います。これから分析結果を期待したいものです。

さて、これらの作業を行った場所には当然住まいがあったと想像できます。すなわち、4つの石器集中場所の近く、またはそのものに住居の跡が発見されてもおかしくないのですが、残念ながら発見できませんでした。実は旧石器時代の遺跡からは土に掘込んだ住まいはほとんど見つかっていないのです。

はじめに遺跡の性格をキャンプとしたのはこのためです。土にしつかりと掘込まれた住まいは長期間のその場所での生活を想像しなければなりません。住まいがないとすればやはり短期間のキャンプ生活をくりかえしていたと考えなければなりません。

実は潮山遺跡でキャンプ生活を過ごした人達がかなり広い範囲を移動したことを物語るものがあります。それは遺跡に残された石器の石材です。潮山遺跡で一番数の多い石材は遺跡の南側の山地で見つかる頁岩ですが、数は少ないのですがチャートと黒曜石が見られます。チャートは球磨川より北の地域でしか見ることはできません。そして、黒曜石は球磨盆地西側で鹿児島県との県境、それに水俣市と出水市との県境で取れるもののようです。

これはそこへ石材を取りに行ったと考えるよりは移動生活の予定地の中にこれらの石材を利用できる地点があったとするほうがいいでしょう。このように海岸部から山間部にいたるかなりの範囲を移動して生活するのは何のためなのでしょうか。とても興味のある課題です。

さて、ここで少し話題を変えて地質学と年代のことについてお話しします。1600年前とか3万年前とかの年代はどのようにして出されたのでしょうか。二つの方法があります。一つは考古学的の方法で、遺物の形の移り変わりから年代を探る方法です。もう一つは地質学の方法で、古い時代から積み重なってきた地層の一つ一つを自然科学の分析で何年前かを出す方法です。潮山遺跡では1600年前とした古墳時代の遺跡は住居跡から出土した土器の形から導き出したものです。そして、3万年前とした旧石器時代の遺跡は地層の年代から推定しているものです。

潮山遺跡では年代測定が行われた地層が2つあります。第II層（約6200年前）と第VI層（約2万2000年前）です。実はこの二つの層は火山の大爆発による火砕流なのです。高温の火山灰が地をはって押し寄せて



e. II 層  
(鹿児島カルデラ火砕流)

d. VI 層  
(姶良カルデラ火砕流)

d. 旧石器出土層

旧石器が出る層までの火山灰の重なり

きたものです。その火山はII層が鹿児島県の硫黄島の海中にあり、そしてVI層は大爆発の結果、火口に海水が入り今のが鹿児島湾となった火山です。地質学はとても雄大な物語りを語れそうです。

最後に潮山遺跡の調査が持つ大きな意味についておれます。旧石器が出土する層は年代の明らかなVI層から二つ下の層になります。このことから3万年前により近い年代とすることが可能です。

この3万年前という年代は現在生きている人類にとって忘れてはならない時代なのです。それは人類の進化のなかで最後の進化をとげた新人（今生きている人類の直接の祖先）が世界中に生活の場を広げていった時代になります。

日本列島にもこれらの新人がやってきたのは明らかですが、いつどこからやってきて、どのようにして日本列島という環境になじんでいったのかはまだ不明といえます。特に3万年前後の時期は全国的に遺跡の数が少ないため、日本列島に住み着いた初期新人の様子はまだほんやりとしています。潮山遺跡の成果はこの意味からもとても大きいものです。これから整理、分析が期待されます。

また、古墳時代のムラの跡の発見もめずらしいものでした。球磨盆地では古墳時代に全國的にも大きな勢力をもった豪族がいたとされています。古事記や日本書紀にその名を知られた「クマツ」です。記紀では大和朝廷に従わない野蛮な民とされていますが、見方を変えれば、その当時の近畿を中心とした勢力に対抗できるだけの力を持った勢力があったということになります。

実際、免田町の才園古墳から出土した鏡金（金メッキ）の青銅鏡は中国の呉の国で作られたものです。この当時青銅鏡は単なる鏡ではなく、権力者の持ちものとして尊ばれたものです。したがって中国の呉の国と政治的な関係があつて輸入された可能性があります。

すなわち、独自に中国と関係を結べるような勢力があつたことになります。しかし、これは少ない手がかりから大きなできごとを想像することになります。

今回の潮山遺跡の古墳時代のムラの発見は古墳時代的具体的な様子を積み重ねていく上で貴重な発見といえます。

## 人間集団の居住か? 瀬戸内地方の土器出土!

大津町 大鶴遺跡

神話によれば、阿蘇の神サンが外輪山を蹴破ったあとといわれる立野火口瀬にのぞむ白川南岸の大津町内牧地区に遺跡はあります。

阿蘇外輪山を深く切り込む熊本平野の最奥部であり、険しい山肌が両岸に迫る谷底に、河岸段丘が形成したせまい平坦面がみられます。

調査地点は3ヵ所あり、最も東のC調査区では、縄文時代の多数の土器とともに堅穴式住居が発見されました。出土した土器は、熊本では出土の少ない縄文時代中期の瀬戸内地方特有の土器とされる船元式土器が多数含まれていました。



瀬戸内地方の土器を出した住居あと

また、堅穴式住居は、当初円形とみられていましたが、掘り進むうちに多角形をなし、壁の深さは1m近いものでした。また、外周には、杭跡とみられる小さな深い穴が無数にほれています。これらの住居の特徴は高冷地の気候に対応するためと、強風対策であることが考えられます。

外來系の土器を有する珍しい形の住居跡は、東方から縄文文化を携えて訪れたバイオニアたちの前線基地と見られ、熊本平野を一望するこの地峠が、縄文文化の一つの伝播する重要なルートであったことを窺い知ることができます。遺跡では、このほか弥生時代終末期から古墳時代はじめの堅穴式住居7基と数條の中世の道路と溝遺構が出土しました。



調査の様子

## 縄文時代玉造りの ムラか?

熊本市 山海道遺跡



遺跡上空から三の岳を望む

熊本市万葉寺町というところでは昔から土器のかけらがひろわれていました。ここが山海道遺跡のあるところです。この場所で新しく道路や水路をつくる工事が行われることになりました。そこで工事の前に発掘調査をして記録に残すことになりました。

遺跡は写真でわかるように、金峰山の三ノ岳から東にのびる丘陵の終わりの平らな台地上にあります。このあたりは、今から約120年前におこった西南戦争のはげしい戦いのあったところとしても有名なところです。また、万葉寺町では平成6年にも山海道遺跡より南の場所で万葉寺出口遺跡が調査され、弥生時代のムラがすぐれたをあらわしています。

山海道遺跡では縄文時代後期～晩期のムラが発見されました。家のあとや墓、たくさんの土器が出てきたのです。そして、もっともとくちょうのあるものとして、たくさん土偶と玉が出てきたことです。

土偶とはねんどで作られた人形のことと、20個ほどできました。ほとんどが女性と思われ、胸や腰が大き



土偶の頭ができたところ



まが玉（中央）が出土



埋葬出土の様子（上からのぞく）

きく作られていました。また、おなかが大きくなつたものが多く、にんしんした女性を表わしていると考えています。ではいったい何のためにつくったのでしょうか。ぶじに子供が生まれますようにといのためのおまもりではないかとする説があります。病院も化学的な薬もない時代に作られた山海道遺跡の土偶もおそらくこのようなものだったのでしょう。

ところで、土の中から土偶をはりだして見ると、完全な形のものではなく、どこかがわざとこわされています。なぜなのでしょうか。ぶじに子供が生まれあと、「役割を終えたもの」としてこのようなかたちにしておこなうとする考え方もありますが、くわしくはわかっていません。

玉は2～3cmの小さなものです。まが玉やくだ玉などが200個以上も出てきました。首かざりなどのアクセサリーと考えています。調査した場所の全体からでており、完成品のほかに作りかけのものや作る前のものなど、いろんな形のものが多く出てきました。おそらく、この場所で玉作りをしていたのでしょう。

玉の材料となつた石はすべてが緑色をしたとてもきれいなものです。石の名前は専門家に見てもらわなければわかりませんが、どこにでもあるものではありません。熊本県では見られないといへんめずらしい石のようです。どのようにして手にいれたかはわかりませんが、今の熊本県の外からわざわざ手にいれるわけですから、かなりきちょうなものといえます。また、わずか2、3cmで厚さも1cmもないものに細長い穴を開けるという高い技術が必要です。このようなものを身につけられる人はかぎられていたと思います。

山海道遺跡は、この時代にはとても大事にされた玉を作れる高い技術をもつた人々のいるムラとして有名だったかもしれません。

写真に見られるうめられた土器は埋窯とよばれる土器のひつぎです。10個ほど発見されました。もともとは口の部分にふたがあったと思われますが、長い年月のあいだにくされてこわれてしまったと考えられます。そして、ほとんどの土器の底がなくなっていました。つまり、土器を埋めるとき底をわざと打ち破っていたようです。ひつぎとして使用するためのものでしょうが、どのような意味があるのでしょうか。

それにもまして興味を引かれるのがだれの墓だったかということです。一つには、その大きさから子供用のものだという説がありますが、子供の骨が見つかっ

たわけではありません。いずれにしても、遠い縄文時代において死にたいしてはていねいにはうむついていたことがわかります。そして、墓に土器をもちいることは次の時代の弥生時代に北九州でさかんにつくられた堀留墓の起源と考えてもよいでしょう。

数多くの土器のかけらのほかに石器とよばれる石の道具も見つかりました。矢の先につける三角形のやじり、木を切りたりおこしたり加工したりする石斧（いのの）、ドングリなどの木のみのからをわったりするたたき石、土を押したりする偏平打製石斧などです。このような石の道具を見ると、狩りをしたり、木のみをとり、加工したり、いろいろな生活をしていたことに気がつきます。そして、土器を使って調理をし、おいしいごちそうができ上がっていたことでしょう。

昔の人はさぞかしおかしかったんだろうというのは、私たちがかってに考えたことで、自然のめぐみを最大に利用した豊かな生活をおくっていたのかもしれません。ただ、気候の変化で苦しい生活が続くこともたびたび起っていたことでしょう。

今までのべてきたことは、この山海道遺跡を発掘調査して、考えたことです。このように発掘調査で発見されたものからいろいろなことを考え、それを解明していくことはとても楽しいものです。



調査の様子

ところで、山海道遺跡のような大きな遺跡がなぜそこにあるのでしょうか。たくさんのたべものがあったから？ 水や空気がきれいだから？ 直接の関係はないかもしれませんが、現在、遺跡周辺では日本一おいしいスイカやメロンが作られています。今も昔もこの一帯はとても良い場所なのです。

# まぼろしの阿蘇氏の 居館跡か?

白水村 二本木前遺跡と祇園遺跡

**二本木前遺跡** 二本木前遺跡は南郷谷のはぼまん中にあり、阿蘇五岳がながらかにすそ野を広げるゆるやかな平地上にあります。すぐ南側には昨年度調査を行った二本木前（光熙寺）遺跡があり、その南を流れる白川は西の方へ向かい、熊本平野へとそいでいます。

この二本木前（光熙寺）遺跡からは、約100m×150mと思われる長方形の濠が見つかり、その濠の内側からは29棟の建物あとが見つかりました。そのほか、中國から輸入した磁器の碗や皿と一緒に埋めた墓なども見つかり、かなり有力な人がここに住んでいたものと思われます。ここは、当時の歴史と考えあわせて見るに、「南郷大宮司」と呼ばれた阿蘇氏の「やかた」あとではないか、と考えられています。「南郷大宮司」とは、古代に阿蘇谷で活動していた阿蘇氏が、鎌倉時代ごろに南郷谷を中心をうつして活動していたころの呼び名です。



二本木前遺跡調査地点を北側上空から望む

今回の調査は、その四角形の濠の北側にあたり、圃場整備の工事で遺跡がこわされるため調査を行うことになりました。その結果、前年度調査の四角形の濠にそそぐむ水路や、阿蘇氏の家来のものと思われる建物あとなどがみつかりました。最初1本と思われていた水路も、流れを変えて6本の水路が流れていることがわかりました。鎌倉時代から室町時代にかけてのものですが、四角形の濠の内側が、「やかた」→寺とうつりかわるとともに、水路もその流れを変えていったようです。また、数回の洪水によって水路が一気に埋っていることもわかりました。

遺物もおもに濠の中から出てきています。中國から輸入した磁器の皿や碗、今の愛知県から運んだ大きな甕や、土師器とよばれる地元で作る甕などが中心ですが、濠のなかは水分が多くて木がよく残るため、當時の人が使った木製の椀やはし、建物の柱などがたくさん



水路から出てきた木製の椀（底部が見えている）

見つかりました。熊本県では中世（鎌倉、室町時代）武士の「やかた」のあとを発掘した例はあまりありませんが、今回の調査では、肥後の国を代表する武士である阿蘇氏の「やかた」とその周辺を広く調査することができ、当時の様子を知るためのよい資料になるでしょう。（『文化財通信くまもと』10号参照）

**祇園遺跡** 祇園（安養寺）遺跡は、さきに紹介した二本木前遺跡の100mほど南にあります。ここも圃場整備によって遺跡がこわされるために調査することになりました。ここは、遺跡の南側すぐのところに白川が流れていますし、北側にも高木川が流れています。このように川にはさまれたところであるため、砂のない積が厚く、鎌倉時代のはじめから室町時代のはじめにかけての層が、3つにわかれてはっきりと見ることができます。調査の結果、合計37の建物と、2つの井戸、5本の溝などが見つかりました。



祇園遺跡から阿蘇五岳を仰ぐ

特に注目されるのは規模の大きな建物が多いことで、南北に5本、東西に9本柱をならべた建物（4間×8間）で3方向に庇を取りつけたものと、南北に3本、東西に7本柱ならべた建物（2間×6間）で4方向に庇を取りつけたものが整然とならんで建っていたことがわかりました。さらに両方の建物は鎌倉時代の中ごろから室町時代のはじめまで建てかえをしながらついていたこともわかりました。どちらも底径60cmほどの大きな穴をはり、柱を埋める掘立柱建物という建物ですが、底には大きな石をしいてあり、建物の重



建物群の柱穴が無数に見える（祇園遺跡上空から）

さにたえる工夫がなされています。

これらの建物と平行して、盛り土（基壇）をした上に礎石をしいて柱を立てた特別な建物があります。基壇のまわりには小石をしきつめて長方形に溝をつくっています。ほかの建物とは大きく様子がちがいます。

さらに特殊なのは、その盛り土の中央からめずらしい陶器の壺が完全な形で見つかったことです。これは中国の北部で焼かれた壺（磁州窑系壺）で、白地に黒い絵の具で鳥の絵がかいてあります。

当時、中国からいろいろな陶磁器を輸入していましたが、それも貿易港のある中国南部で焼かれるものが中心で、このように中国の北部の特殊な壺は、特別にとりよせた珍しいものだと考えられます。全国的に見ても寺院や「やかた」跡などで破片がしばしば見つかりますが、完全な形で出土したのは初めてです。



建物が建つ土地の悪霊を鎮めるための仏具を入れた壺

この壺のほかにも、珍しい陶磁器の破片がたくさん出土していますので、よほど有力なひとが「やかた」をかまえていたものと考えられます。

さきに紹介した二本木前遺跡と考えあわせると、阿蘇氏が主で、鎌倉時代のはじめに二本木前遺跡のほうに、鎌倉時代中ごろにこの祇園遺跡のほうへ中心をうつしたのではないかと考えられます。

## 中世武士豪族居館の 全域を発掘！

深田村 灰塚遺跡

灰塚遺跡は、深田村加茂字灰塚地内にあり、県営緊急畠地総合土地改良事業の工事に先立ち、平成5年度から埋蔵文化財調査を実施してきました。遺跡は熊本県南部の九州山地内に開けた標高100~200mの入吉盆地の中央部にあり、遺跡の西側には、日本三大急流の一つ「球磨川」が流れています。遺跡は盆地の平野に北からつづけた平たい台地上にあります。台地は平野から25mの高さにあり、入吉盆地を広く見渡すことができます。

調査の結果、绳文時代早期（今から約6000~10000年前）と古代（平安時代）、それに中世（鎌倉時代）の3つの大きな遺跡があることがわかりました。今回は古代と中世の時期の遺跡の様子、特にその時期の墓について紹介します。

古代と中世の灰塚遺跡は東西100m 南北160m の範囲のなかに大きくりっぱな建物がたくさん建てられている「やかた」（古代では郡家などと呼ばれます。）のあとが発見されています。特に中世の時には周囲を土堤や堀で囲んでいました。

「やかた」や郡家はたんに建物が集まつたムラではありません。そこはその地域の政治や経済の中心として機能しているのです。でも、どうしてそんなことがわかるのでしょうか。灰塚遺跡から発見された遺物や建物からみてみるとことししましょう。



掘立柱建物の柱穴の組み合わせを調べたところ

まず建物です。灰塚遺跡から発見された建物は掘立柱建物です。地面にあなをほり、そこに柱を立て、組み立てる家です。この建物は小型のものから大型のものまであるのですが、灰塚遺跡から見つかったものは5間×6間で4方に庇が取りつけてあるものなど圧倒的に大型のものが多いのです。しかも、柱そのものも直径が30cmを超えるほど大きいのです。柱が大きいということは天井が高く、広い空間を作り出すことができます。多くの人間が集まる場所として作られたのでしょう。いわば現代の公共施設であり、政治的に中心となる場所です。



10世紀の土壙墓（左側に頭部の骨粉が見られた）



記録するための大変な実測作業



「權」(約4cm)



埋蔵文化財の発掘調査は人の力に頼る以外にありません

次にお墓です。東西100m 南北160m の大型の建物が集まる範囲の南側に接して2つの墓が見つかりました。この2つの墓は作られた年代がちがいます。一つが10世紀ごろで、もう一つが12世紀の終わりごろのものです。この2つの墓がなぜ大事なのかといいますと、墓に葬られた人物によって灰塚遺跡がどのような性格をもった遺跡であったかがわかるからです。

10世紀の墓は地面に幅60cm 長さ150cm ほどの長方形をした墓穴を掘り、棺の中、あるいは棺の上に、ほうむられる人に供える品物（副葬品・供獻品）が置かれています。いくつかある中で特に重要なものが、中国製の青銅鏡（湖州鏡）と白磁と呼ばれるやきもので。また、このお墓の近くに、当時の重さの基準となつた「權」と呼ばれる青銅のかたまりで、円い形の頭の部分にひもを通してあるあいたものが出土しました。

12世紀の終わりの墓は10世紀のものと違い、墓穴の幅が広く、墓穴の底に木炭をしきつめていました。この墓にも中国製の白磁碗や皿5枚の重要な副葬品が発見されました。

これらの墓に葬られた人物はいったいどういう人物なのでしょうか。当時としてはなかなか手に入りにくい中国製の陶磁器や青銅鏡を供えてあることや「權」というだれもは持ち得ない重さの基準となるものが出土していること、そして12世紀終わりの墓に見られた大事な遺体の腐敗を防ごうとしたと思われる木炭の利用などは政治的に力をもった人物（權力者）と考えられます。

このような人物がすぐ近くに葬られた建物群、それが先にふれた郡家であり、「やかた」ということになります。この「やかた」の主については文献（文字で書かれた歴史資料）から須恵氏の可能性が強いようです（『文化財通信くまもと』第10号参照）。



12世紀の土壙墓

# 平安時代から鎌倉時代の 武士の屋敷か?

深田村 西ノ原遺跡

西ノ原遺跡は、熊本県南部、球磨盆地の中央部に位置する深田村にあり、盆地を貫流する球磨川から北に向かって600m行ったところの山の中にあります。遺跡の西側には、球磨川の支流、田頭川が流れています。また、遺跡の南東方向400mのところには、豪族須恵氏の館跡といわれている灰塚遺跡があり、平安時代の終わりから鎌倉時代にかけて営まれた遺跡です。

西ノ原遺跡は、柵を整備する工事に先立ち、平成7年度から県文化課および深田村教育委員会が発掘調査を行いました。調査の結果、縄文時代早期、中期、平安時代、鎌倉時代のころに人が生活していたことがわかる遺物や遺構を確認しました。



調査区の様子

縄文時代の早期のものは、押型文土器が若干出土しています。また、焼けた石がたくさん集まつた集石が30数基ほど確認され、ほかに、石鍬・石槍・石臼・磨石や黒曜石・チャートなどの小さな割片、さらに、割れた河原石がたくさん出土しました。特徴的なものとして集石があげられます。これは、調理に使用されたと考えられます。この集石の中には、花びら状になつた集石があります。この中に、焼けた小石が入り込み、そして、それに隣接して焼けた小石の集石が積み重なっていました。このことから、小石を集石炉で焼い



焼けた石が散乱した状態（集石）



石を焼く集石炉

て近くに移していたことがうかがえる資料で、その集石炉と集石は、一つのセットであろうとの指摘がありました。縄文時代の晩期のものは、黒色磨研土器が少し出土しています。

平安時代のものは、10世紀頃の須恵器や土師器などの土器や掘立柱建物跡3棟、土壙墓、溝の遺構を確認しました。この中で特徴的なのは、墨書き土器で、欠けた土器の皿の底に、「□成」と縦書きに墨書きされています。また、掘立柱建物跡のひとつは、2間×3間の柱の建物であることがわかりました。



「吳家合字福」の文字が見える

鎌倉時代のものは、掘立柱建物跡1棟や土壙墓を確認できました。特徴的なものは、中国大陆から渡ってきた青磁の合子で、ふたはありませんが、ひとつのお壙墓から2点出土しました。そのひとつ底には「吳家合字福」と浮き出た文字があり、その意味は、あなたの家が幸せであるようにとの願が込められています。この種類の合子は、遺跡近くにある灰塚遺跡にも出土しているので、同時期に何かの関係があったのかもしれません。

## { 解 説 }

第12号では熊本県文化課が平成7年度から平成8年度にかけて行った7つの発掘調査の成果を要約して伝えています。

これらの発掘調査はいずれも県下で実施された農政事業の土地開発行為によって埋蔵文化財がこわされることがわかつたため行われたものです。発掘調査では、遺跡がなくなても記録から遺跡が復元できるような精密な記録をとります。これを記録保存と呼んでいます。

これらの記録は1冊の本として刊行され、県民に対する情報として提示される予定です。ただ、まだ発掘調査終了から日も浅く、報告書作成のための整理作業には入っていません。そのため、今回の報告は発掘調査の主要な成果の速報という形を取っています。

また、なるだけ県民に分かりやすい説明になるように、学問的には論議が分かれることでも調査者の判断でひとつの解釈をおこなっています。

\*

\*

さて、今回紹介する文化財はいずれも埋蔵文化財と呼ばれているもので通常は遺跡とよばれます。

遺跡は一般には建物や家のあとなどの遺構群とその中から出土する土器や石器などの遺物群から成り立っています。その遺構群と遺物群がムラであるとか墓地であるとかのあるまとまった性格を表わしています。

したがって、同じ場所でも、より深いところからは縄文時代の遺跡が、浅いところからは古墳時代の遺跡が発見されるというように異なる時代の遺跡が重なっていることもあります。しばしば見られることになります。

また、よく○○遺跡を○○古墳と勘違いされる方がおられます。4世紀から7世紀にかけて各地の豪族たちが自分たちの力を誇示するために大きな墓を造ることが流行します。この大きな墓が古墳と呼ばれるもので、基本的には遺構になります。

\*

\*

今回報告する7つの遺跡は2頁に示したような時代の遺跡です。これを見るとひとつずつ複数の時代に名前が見られます。これは先に述べましたように違った時期の遺跡が同じ場所に重なってしまったことを表わしています。

さて、これらの各時期の決定は出土した土器などの遺物の型（型式）によって判断しています。ものには必ずかたちの移り変わりがあります。その移り変わり

の各時期の違いは考古学的に細かく確かめられています。ただ、潮山遺跡の年代に関しては、地質年代からの推定によっています。

\*

\*

潮山遺跡の年代は3万年前という推定です。有名な岩宿遺跡の年代の少し前になり、原人段階の遺跡として50万年よりも前の年代を示した高森遺跡よりはずいぶんと後になります。

教科書では旧石器時代（日本史では先土器時代と記述されているようです）の人類の生活の様子を中心とした記述になっており、集団としての人類の移動や移住にはなかなか言及していないのが現状です。

人類史での原人、旧人、新人段階での人間集団の移動や移住があったことはほぼ間違いない事実です。このような人類集団の移動の波はその後各時代にも形は変わらながらも認められることも事実です。

そして、それが日本という地域、日本人という民族の形成の上で基本的な要因になっているのです。このような意味からも人類学的なあるいは東アジア的な観点からの人類集団の移動や移住を遺跡によって示していくことも大事なことだと思います。

3万年前という年代は人類学では旧人から新人への進化の後、新人が世界各地へその生活の場を広げていった初期の頃になります。当然、当時の日本列島へもやってきていたことは明らかです。

ただ、その証拠となる遺跡は全国的にも少なく、熊本県でも当遺跡と松橋町曲野遺跡、それに熊本市の石の本遺跡の3遺跡のみです。したがって、その時期の社会や生活の内容はまだ不明のままであります。今後、遺跡の増加によって次第に明らかになるでしょう。

\*

\*

山海道遺跡は縄文時代の終わり、縄文時代晩期の遺跡です。縄文時代のイメージが青森県三内丸山遺跡の発見で大幅に変化した昨今、弥生文化優位の歴史観の見直しも必要になりつつあります。

さて、その弥生文化の基盤になった原始農耕がすでに縄文時代晩期に始まっていたのではという説があります。ヒエ、アワなどの焼畑農耕が想定されているのですが、すでにイネ（陸稲）もつくられていましたのではないかという考え方もあります。

実際に弥生時代の始まりよりは1000年よりも前の約3000年～3500年前の縄文時代後期から晩期にかけての

遺跡から稲作の断片的な証拠が出てきています。それらは米粒の炭化したものであるとか、イネの花粉やブランドオバールであるとかの自然科学からの証拠です。

しかし、これらの証拠は明確に稲作を証明したことにはなりません。なぜなら、遺跡に持ち込まれた可能性も考えられるからです。直接、田の跡が確認されるとか、稲作の導入によって遺物や集落の構造に大幅な変化が見られるようになれば確実性を増します。

山海道遺跡で見られた玉類の豊富な出土は、身に付けるものに差が生じていたことがわかります。それが何らかの権力を表わすものであるならば、その社会に階層があることになります。

余剰が生じた場合に社会が階層化するとすれば、その余剰とは何だったのかということになります。熊本を始めとして南九州ではこの時期の大規模な遺跡が多い地域です。弥生時代の開始にさきがけて、コメ作りが始まってい立とすれば面白いことになります。山海道遺跡の整理作業が楽しみです。

\*

\*

最後に3年ほど注目すべき発掘が続けられた二本木前、祇園遺跡と灰塚遺跡について述べます。このうち二本木前、灰塚遺跡については第10号でも詳しく紹介しており、二本木前遺跡が阿蘇氏、灰塚遺跡が須恵氏の館跡であるとの推定がなされています。

これは平安時代末期から鎌倉時代の肥後の歴史を考える上ではかなり重要な指摘です。律令体制が崩壊する過程のなかで土地や農民層の再編成の中心となつた地方の武士団は平安時代末期の保元・平治の乱、源平の戦い（治承・寿永の乱）を経て、ついに政権を握ることになります。

肥後においても平安時代を通じて武士の勢力の拡大が見られたことはあきらかでしょう。そして、菊池氏、阿蘇氏、相良氏の三大武士団を中心として中世史を形成することになります。

いわば、律令体制下における国府を中心とした中央集権体制から各武士団の支配地域を中心とした地方分権ともいいくべき状況になっていきます。

これは政治体制だけの問題ではなく、当然のことく経済的、また、文化的な側面にまで及んでいるはずです。その中心として各武士団の館がクローズアップされてくるのです。

すなわち、館が単に武士団の棟梁の屋敷として機能

していたのではなく、政治、経済、文化の中心として存在したと考えなければなりません。

阿蘇氏は古代より「阿蘇神道」とも呼ばれるような宗教的な背景のもとに阿蘇谷を中心としてその勢力を維持してきたのですが、平安時代を通じて武士化していったのは必然でした。

そして、鎌倉時代幕府から南郷大宮司と称され領地を安堵されたように武士団としての領地の拡大を山間部から平野部に求めたのも必然でしょう。

武士としての側面が強まるにつれ、その館を宗教的な故地である阿蘇谷から今回発掘された二本木前・祇園遺跡のある南郷谷へ、そして矢部の浜の館の地へとより平野部に近い場所に移していったと言えるのです。

須恵氏の場合もかなり似た面があります。須恵氏も古代に農業生産をつかさどる豪族であったのですが、やはり平安時代を通じて武士化し、その勢力を拡大していったようです。

そして、館があったと思われる人吉市尼が土手の故地から、より武士団として動きやすい球磨盆地中央部の深田村灰塚遺跡のある地へと館を移していったと考えられます。

その後、球磨盆地には鎌倉幕府から地頭として相良氏が派遣されますが、10号でもふれましたように須恵氏はいちはやく相良氏と姻戚関係を結び、その勢力を維持したようです。

\*

\*

今回、中世史を考える上で重要な発見となった2つの遺跡は断わるまでもなく、考古学あるいは遺跡学からの成果です。

奈良時代以降、文献が増えてくる歴史時代になると考古学は歴史学の補助学のように言われることがあります。決してそうではありません。両者が相互に成果を突き合わせることで一つの歴史的な史実を作っていくものなのです。

今後もこの『文化財通信くまもと』で考古学的な成果を歴史学に使える成果（史料）として分析を行い、提示していきたいと考えています。

No	遺跡名	所在地	調査面積	事業名	調査期間	時代
1	二本木前	阿蘇郡白水村中松	3,700m <sup>2</sup>	圃場整備	H7.5~10	中世
2	紙 団	タ	3,500m <sup>2</sup>	タ	H7.11~H8.3	タ
3	大 鶴	菊池郡大津町瀬田	4,000m <sup>2</sup>	タ	H7.10~H8.3	繩文中、弥後
4	山 海 道	熊本市万葉寺町	3,500m <sup>2</sup>	農村住環境整備	H6.12~H7.10	繩文後、晩
5	潮 山	球磨郡湯前町	3,000m <sup>2</sup>	農道	H7.8~H8.1	旧、古墳前、奈良
6	灰 塚	球磨郡深田村	6,000m <sup>2</sup>	畠地帯総合	H7.4~H8.3	繩早、平安、中世
7	西 ノ 原	タ	3,500m <sup>2</sup>	タ	H7.9~H8.3	タ



遺跡所在地図（1～4）



遺跡所在地図（5～7）

### 編集後記

今回、本書のスタイルをかなり変えてみました。読み物としての要素を取り入れたいと思い、遺跡の性格を割と大胆に表現しています。このような試みが、県民の遺跡への理解につながれば幸いです。

さて、最近、よく耳にするのが文化財の有効利用という言葉です。県民の文化財にたいする知りたい、触れたいという要望は近年かなり大きくなっているようです。

これに答えるためには調査した遺跡、遺物の整理、報告書作成、遺物の保管、保存処理がしっかりとなされなければなりません。

開発に伴う緊急調査に追われ、これらのこと

がなかなかできない状況です。

この小冊子がそれらの一端を知ることになれば調査員一同、望外の喜びです。

### 第12号

平成9年2月28日 発刊  
発行 熊本県教育委員会文化課

☎ 096-383-1111 (内線6715)  
印刷 (株)ハタノ

08 教委 文教

③ 009